

## 同情心の欠落

メアリー・ラスラップは 19 世紀のアメリカ人のメソジスト派伝道者であり、詩人でもあった人物です。彼女が執筆した「Judge Softly (寛大な裁きを)」という詩は今日にも強く受け継がれています。この詩は、社会の片隅で生る人々に対して、同情を持って生きるように促しています。例えば、アメリカ先住民の生きる様子を描写しています。下記に、特にそれをよく表している箇所を抜粋してみました。

モカシンを履いて 1 マイルを歩け  
あなたが誹謗中傷を口にする前に  
もし 1 時間歩くなら、あなたは見つけることができるだろう  
己の考えではなく、彼の目を持って見ることを

後に、この詩は「Walk a Mile in His Moccasins (モカシンを履いて 1 マイルを歩け)」として知られる事となります。モカシンとは北米の先住民が履いていた革靴です。この一文を現代版に改変するならば、「相手の身になって考えよ」となることでしょうか。これは、他人の痛みや悲しみを体験することで、本当の意味でその人を理解することができる。そこでは、誹謗中傷ではなく同情という感情が生まれるという意味です。

このように、批判的な考えを抱く前に、いつも、まず他人の靴を履いて 1 マイル歩くことを身に付けている人は、とても稀でしょう。多くの人々が、まさに今このビデオ礼拝を見ている中の何人が、同情心の欠落を感じている事はとても悲惨な現状です。そして、もしこの思いやる心が、本来は満ち溢れるべき場所である教会にも欠落しているならば、それは非常に恥ずべき皮肉です。教会に同情が欠乏するだけでなく、他人の欠点を批判し、神様のように振る舞って、自分には罪はなく、他人の欠陥を完璧に把握していると考えようになったら、そのような状態の教会は、まさに悲劇的状況から恥ずべき皮肉を伴った存在となります。私たちは、そのような場所を避けたいことでしょうか。それだけではなく、周りの人々は私たちを避けるかもしれません。

しかし、どのような状況であっても物事を正しく見て、完全に理解し、公正な判断を下せる唯一の方がおられます。それは神様です。そして、救いをもたらすように、完全な同情を与えてくださる唯一の方がおられます。それは神様の御子です。そして、そのお方は決して罪に屈することはありませんでした。そこでは、あなたが如何なる状況に置かれていても、イエス様の憐れみから、御力が生まれます。

本日の聖書箇所を通して、神様は、偉大なる大祭司であられるイエス様の真実によって、私たちが元気づけられ、また、私たちの必要をイエス様の御前に持って行く中で、私たちの信仰と、日々の信仰の実践がさらに堅くされることを望んでおられます。

落胆、憂鬱、絶望といった様々な痛みで満たされたこの世界で、私達には励ましがが必要です！時折、私達は神様から見放されたと感じることがあります。そこでは、沈黙のみが存在し、神様から見放されたかのように、苦しい経験をします。神様の存在を感じる事ができない、または神様が私達を思っておられないのではないか、さらには、困難な状況がいつこうに好転しないので、神様は無力なのではないかと感じるがあります。しかし、本日の聖書箇所は、このような考えと正反対のことを教えています。

－ イエス様は強大であり、且つ憐れみと愛をも備えられています。

偉大な目的：イエス様の完全なる同情によって、私達は、いずれ訪れる、全知なる神様による審判においても、確固たる希望を持つ事ができるのです。

### 私達の信仰を堅く保つ偉大な真実 (14 節)

14 節では「さて、私たちには、もろもろの天を通られた、神の子イエスという偉大な大祭司がおられるのですから、」と記されています。

ヘブル人への手紙の著者は、神様の御言葉が、私達が他人から隠している心を暴く力があるだけでなく、神様は全てを見通しておられ、私達が全てを申し開かなければならない存在である点を説いています。ある意味、これは不安や恐れを抱かせるものかもしれません。私達は、生活のあらゆる側面で、様々な感情を心に持ち合わせています。罪を伴う動機を他人から咎められたら、当然恥ずかしいし、その人が自分を非難するだろうと恐れさえ抱くでしょう。ましてや、神の御前に私たちの全てがさらけ出される裁きの日に対して、私たちはどれほど大きな聖い恐れを持たなくてはならないでしょうか。

この書の著者は、1 章の前半部分で、旧約聖書時代にイスラエルの司祭が行った罪のきよめの業を、御子が「成し遂げて、いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれた」事実を思い出させてくれています。

それから、第 2 章の最後では、「あわれみ深い、忠実な大祭司となるために、イエスは全ての点で兄弟たちと同じようにならなければ」ならなかったことが記されています。

そして、第 3 章の初めに、初めて御子がイエスであると記されます。そして、モーセよりもはるかに偉大な存在として、「私たちが告白する、使徒であり大司祭である」と記されています。この大司祭という形容こそがイエス様の現実の御姿であるということを、著者は、脈々この書を通して語っています。

「もろもろの天を通られた、神の子イエスという偉大な大司祭」と記されていますが、神の御子は天を通られただけではなく、今もそこにおられ、私たちの代表として、父なる神様の御前に大祭司の役割を果たしてくださっています。

イエス様は天から、人間の姿を持ってこの地上に来られただけではなく、再び天に昇られたのです。そこでも、権威（または権力の座）である神の御座に座し、私たちをとりなし続けてくださっています。イエス様は高く上げられたお方であるゆえに、際限なく偉大なのです。

イエス様の偉大さというこの力ある事実は、今ここにいる私たちにとって、とても関係があります。だから、著者は 14 節で次のように述べています。「信仰の告白を堅く保とうではありませんか。」

私達は、キリストにある素晴らしい救いを与えられています。必ず訪れる裁きの日に、私たちは気を落とす必要はありません。むしろ、とりわけ確信をもって、キリストにある信仰の告白を堅く保つことができるのです。

悪魔は、私達を過去の罪の中に捕らえておこうと試みるでしょう。そうすれば、私達は非難されるだけだと希望を失うからです。そして、それならば今を楽しめばいい、また神様は見通す力も、究極的には裁く力もないという嘘が生まれます。このような考えが頭の中に芽生えた時、私達は罪の救済を自分自身の中に求めることがあります。又は、他人やその他の事に救いを求めることもあるかもしれません。罪への悪循環に落ち入り、気を落とし、時には、救いはキリストだけが与えてくださるという告白にさえ疑いを持つかもしれません。

なぜなのでしょう？それは、神様の御子であるイエス様が、信じるすべての人に代わって、父なる神様の御前に力強く立ってくださっているという大切な事実を、私たちが忘れてしまうからです。

イエス様の御力を覚えなさい。今この瞬間、そして私たちが全能の神様の御前に立ち、報告を行うその日まで、イエス様は大祭司として、私たちが代表して立ってくださっています。イエス様の偉大さという力強い事実ゆえに、これを理解し、確信してください。

ローマ人への手紙 8 章 31～34 節での使徒パウロの言葉を思い出してください。「<sup>31</sup>神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。<sup>32</sup>私たちすべてのために、ご自身の御子さえ惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるでしょうか。<sup>33</sup>だれが、神に選ばれた者たちを訴えるのですか。神が義と認めてくださるのです。<sup>34</sup>だれが、私たちが罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていてくださるのです。」

イエス様は私達にとって尊大な大司祭として全能であられるだけではなく、憐れみと思いやりに満ちたお方なのです。

### 私達の信仰を堅く保つ、イエス様の憐れみ深さ(15 節)

#### ・ 同情 (15 節)

15 節に「私たちの大司祭は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。」と記されています。

「同情する」と訳されている原語は元々、「一緒に」という意味の接頭語と「痛み」という意味の言葉の二語からできています。言葉の通り「痛みと一緒に」という意味で、ラテン語では、「憐れみ」と訳されました。どちらの言葉も、「他人への思いやり」を意味します。従来、この言葉は、母親が我が子に抱く感情や兄弟がお互いを思う感情を表現するのに使われていました。

大司祭であるイエス様は、私たちがこの壊れた世で直面する様々な弱さ—あらゆる罪との日々の格闘だけでなく、失望、病、悲しみ、嘆きといった日々の試練をご存知です。

聖書には 3 つの強大な敵が描かれています。それは、地上の世界、肉欲、悪魔であり、これらは、神様にとって私たちは大切ではなく、神様が冷淡であると嘘をついて私たちに錯覚させます。

私達は、人生が上手くいかない時、神様に特に失望しやすくなります。自分の持っていない物を持っている他人に嫉妬します。災難に遭えば、怒りや苦々しい気持ちを持ちます。そして、私達は、神様が自分に無関心である、または神様にはこの状況を変える力がないと心を閉ざしてしまいます。

ですが、このような状況にある時こそ、よりいっそう、神様の尽きない愛の真理と、私たちの弱さに対する神様の憐れみがあなたの心にとどまりますように。

私たちが、

・すべての点において、試みにあわれながらも、罪を犯されなかったお方(15 節)  
を見上げることができますように。

15 節では「罪は犯しませんでした、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。」と記されています。

イエス様はすべての点で、試みに会われました。この壊れた世界で私達が経験しうるすべての試練や誘惑を、イエス様もその身に受けられました。これにより、イエス様は、私達に同情する(私たちとともに歩く)こと、さらには共感する(私たちの靴を履いて歩く)ことができるようになりました。

あらゆる側面で、再び、私達はイエス様が人間として、その身に経験したことを知らされます。イエス様は私達が直面するのと同じような誘惑や逆境に直面されました。しかし、そこには一つの大きな違いがあります。

イエス様は全くの罪なき方です。あなた方や私の心のどこかに住み着いている強欲、絶望、傲慢、性欲、悲痛、嫉妬、その他もろもろの罪に決して陥られませんでした。。

これこそが、イエス様が人となられた理由です。父なる神様が人間の体と心を持った御子に課した試みでした。それは、祭司としての務めの頂点に到達する一すなわち究極のいけにえを捧げる一までに、イエス様が私たちの罪の罰を、完全に代わって受けてくださるようになるためでした。それは、100%人間としてふさわしい代価を支払い、100%神として計り知れない代価を支払うためです。

しかし、ある方はこう言うかもしれません。「イエス様は罪を知らない。そのような方がどのようにして、人生を通して罪を重ねた我が身に同情できるだろうか。」

しかし、現実には、誘惑から逃れようとすればするほど、より強大な誘惑に悩まされ、ある意味、さらに苦しみます。C. S. ルイスは次のように述べます「正しい人々が誘惑を知らないというのは、なんとおろかな考えであろうか。これは明らかに嘘である。誘惑と戦った者のみはその強大さを知るであろう。たった5分で誘惑に敗れた者は、それが1時間に及んだ際の様子を理解することはない。ある意味で、これが、悪人は悪が何たるかを理解しない理由である。彼らは、常に屈するという己の世界観の中でのみ生きているからである。故に、キリストは誘惑に屈しなかった唯一の方であられるから、誘惑の真の姿を知る唯一の方なのである。イエスだけが、唯一の完全なる現実を知るお方である。」

イエス様はあらゆる誘惑に会われながらも、私達のように誘惑に負けるのではなく、それに打ち勝った、完全なる憐れみ深い大司祭です。来週の説教でも述べますが、イエス様は、その憐れみゆえに、完全なお方となりました。イエス様は誘惑が何なのかを、私達の誰よりも理解されておられながらも、罪を犯されませんでした。このイエス様の同情と憐れみのすばらしさゆえに、私達は確かな望みを持てるのです。

イエス様は大司祭として全能であられます。そして同時に、私たちに対しては、完全な愛を持っておられるお方です。

#### 私達を大胆に御座に近づけさせてくれる事実 (16 節)

16 節では「ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」と記されています。

前節でお伝えした、もろもろの天を通られたイエス様の御力、そして、優しい支えという現実が、私達に御座へ近づく大胆さを与えてくれることに注目してください。

私達が(今は祈りの中で、そして来る審判の日には面と向かって)近づこうとする御座は怒りや責めを負う場所ではありません。そこは、神様の恵みを頂く場所なのです。

恵みとは何なのでしょう？それは、全く受けるに値しないはずの私達が、神様から与えられる慈愛と赦しです。この偉大な大祭司を信じるどんな人でも全員に、神様から与えられる確かな約束された贈り物です。

私達が祈りの中で神様に近づく時、神様はいつも、公然と、優しく、愛をもって、私達を受け入れてくれます。

私達が神様への祈りを躊躇する顕著な原因の一つは、私達が、神様の御座が恵の御座であることを信じなくなることです。そんな時、私達には神の御座が、失望、怒り、無関心なものに写るのです。そのような嘘をもう信じてはいけません。そして、自分の目を今一度、イエス様一進んで助けるお方、また助ける力をお持ちの唯一のお方—という現実に向けるのです。

スコットランド生まれのアメリカ人説教者アリスティア・ベッグは次のように述べました「今朝、助けを必要としない方はおられますか？人生の中で、助けを必要としない瞬間はありません」。同情や思いやりがしばしば、軽蔑や批判に置き換えられる世の中で、憐れみ深い主に贖われた私たちは、そのことを知ることができます。

### すすんで救い、また救うことのできる大司祭

イエス様は私達の靴を履いて歩いてくださっただけではありません。その一生は死に至るまで、私たちの靴で歩まれた旅でした。しもべの姿をとり、人間と同じようになられ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。一切の罪のない方です。イエス様だけが、完全な憐れみを持ち、私達を神様のみもとへ導いてくださる全能の大司祭です。

これを説明するのに、説教者ジョン・マッカーサーが形を変えて語った、ある信じられないような実話があります。フレデリック・ブースタッカーは 19 世紀後半から 20 世紀前半を生きた救世軍(サルベーション・アーミー)の指導者で、救世軍創始者メンバーであるウィリアム&キャサリン・ブースの義理の息子であった人物です。ある夜、シカゴで伝道集会をし、キリストのあわれみについて説教したのですが、その集会の後、ある男が近づいてきました。そして、どうやったら愛と理解と憐れみにあふれた神様のことを話すことができたのか尋ねました。「もしあなたの妻が、私の妻のように亡くなったばかりで、そして、赤子はその母親を求めて泣き続ける様子を目の当たりにするなら、それでもなお、あなたは今日の説教を口にすることができますか？」

数日後、ブースタッカー氏の妻が電車事故で亡くなりました。彼女の遺体は葬儀のために、数日前に説教が行われたシカゴの同じ場所へと運ばれました。葬儀の後、彼は静かに眠る妻の顔を覗きこみ、そして葬儀の参列者に向かって語り始めました。「数日前も私はここにいました。そこで、ある方に、もし私の妻が亡くなり、私の子供達が母親を求めて泣き続けたとしたなら、キリストが理解があり、思いやり深く、すべての必要を満たすのに十分なお方だとは言えないだろうと言われました。もし、その方が今ここにいるなら、私は伝えたいです。キリストは十分なお方です。私の心は引き裂かれました。砕かれました。しかし、私の心には歌があります。キリストが下さった歌です。私は妻を失い、私の子供達は母を失いました。しかし、イエス・キリストは、今日も変わらず、私の心に安らぎをもたらしてくださいます。」その男は、葬儀の場にいました。そして歩み出て、棺のそばにひざまづき、ブースタッカー氏は彼をイエス・キリストに導きました。